

史跡をたずねて各駅停車

京王線歴史散歩



関根 裕子 著
滝沢 仁志

武蔵野に眠る歴史を訪ねて

超高層ビルが立ち並ぶ新都心新宿から
伝説に彩られた深大寺、新選組が活躍
した多摩川原、南北朝の古戦場を経て
千人同心の八王子までひた走る京王線。
その豊かな歴史を訪ねての小旅行を！

鷹書房弓プレス



9784803403725



1920021012006

ISBN4-8034-0372-4

C0021 ¥1200E

鷹書房弓プレス

定価：本体1200円+税



(表) 都心と武蔵野を結ぶ京王線
(京王電鉄株式会社提供)
(裏) くらやみ祭りで名高い大國魂神社

豊かな旅のみちづれとなる本

史跡をたずねてシリーズ——
各駅停車

横須賀線 小田急線 京浜東北線
山手線 中央線 南武線 総武線
東急東横全線 西武新宿線 西武
池袋線 京浜急行線 東武東上線
阪急線 京阪線など26点刊行中。
本体980円～1200円

女ひとり旅シリーズ——

京都・大和路・鎌倉・奥の細道・
信濃路・新選組・神戸を発売中。
本体971円

浜田山駅

豪商・浜田弥兵衛

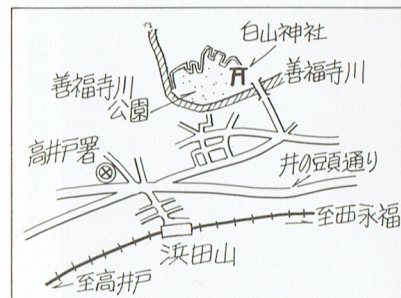
西永福、浜田山と、付近に住んでる人以外には馴染みのない名前の駅がつづく。

浜田山という名前は、あたりの地名からとったもので、元々の由来はこの地に江戸時代初期の商人、浜田弥兵衛の別荘があったことによる。

浜田弥兵衛は伊勢国三重郡浜田村の出身で、長崎代官末次平蔵の手代として、元和年間（一六一五～一六二四）に御朱印船の船長として活躍していた人である。

伝説上の浜田弥兵衛は、その当時台湾南部を占領していたオランダと対抗して、中国からじかに生糸を買い付けて莫大な利益をあげていたのだが、その為にオランダの領事とトラブルが生じて船を差し止められてしまった。しかし弥兵衛は、その折衝中にオランダ領事に白刃を抜いて飛びかかり、差し止められた生糸と賠償金を受け取り、その上にオランダの船を奪いとって帰国したという。

その荒っぽい弥兵衛は、その後、長崎から江戸に出て米穀商を営んだのだが、ある日、大宮八幡宮に参詣のおりにこのあたりまで来て、あたりの風景を気に入って別荘を建てたのだそう。そのころのこのあたりは松の林が地平線までつづくかと思われるほどの原野で、その松林がど



理性寺にある浜田弥兵衛の墓



ことなく海原を思い起こさせたのであろうか。

弥兵衛の別荘がどのあたりにあったかははっきりしていないが、現在の浜田山四丁目から成田西一丁目にかけては、明治の初期にあっても、鬱蒼とした松林が残っていたそうで、そのあたりが浜田弥兵衛の持ち山だったといわれている。また、その森の中に浜田家の墓があって、明治半ばごろまでは浜田家の一族が人力車で参詣に来ていたそう。そのために、そのあたりは一名江戸山と呼ばれ、墓の前の花差しに溜まった水が眼病に効くといった迷信すらあったという。

その浜田弥兵衛の墓は昭和二十年に、西永福の項で簡単にふれた理性寺に移されたのだそうで、現在もその墓が残っている。それを見ても、浜田屋弥兵衛の墓というのは二基あり、一つは裏面に生国伊勢三重郡浜田住俗名浜田屋弥兵衛とある。二つめの裏面には武州豊島郡内藤新宿上町俗名浜田五良八事浜田弥兵衛生年三十九才とあり、同じく側面に宝暦五年乙亥六月初七日とある。宝暦五年は西暦でいうと一七五五年だから、二つめの墓はおそらく、御朱印船で活躍した浜田弥兵衛の子孫のもので、浜田屋では代々弥兵衛の名を名乗ったものと思われる。一つめの墓には年銘がないので、詳しいことはわからないが、あるいはこれが、台湾で活躍した初代の浜田弥兵衛の墓なのかも知れない。

<著者紹介>

関根治子（せきね・はるこ）

本名・山下治子

昭和34年、福島県梁川町に生まれる。國学院大学文学部史学科卒。フリーライターとして雑誌などにエッセイ、ルポ、歴史読物を書く。著書に『縄文時代と耳飾り』（シーアイエー）、共著に『歴代天皇100話』（立風書房）などがある。

滝沢仁志（たきざわ・ひとし）

昭和34年、東京都杉並区に生まれる。法政大学文学部歴史学科卒。松竹シナリオ研究所基礎科修了。シナリオを書くかたわら、フリーライターとして歴史、経済などの分野で活躍。

京王線歴史散歩

平成2年7月31日 初版発行
平成10年8月1日 第3版発行

著者 関根治子
滝沢仁志
発行人 寺内由美子
発行所 鷹書房弓プレス

〒162-0811 東京都新宿区水道町2-14
電話 (03) 5261-8470
FAX 03 (5261) 8474
振替 00100-8-22523

ISBN4-8034-0372-4 C0021

シナノ印刷・関川製本

山頂への道



ゆる滝に打たれて修行するものだ。火の行は、毎年三月に行なわれる火渡り祭でおなじみのように、念仏を唱えながら火の上を素足で歩いて渡るといふもの。テレビなどで紹介されることがあるから、御存じの方も多いだろう。

それらの行を行なうのは山伏といわれる修行者達だが、彼らは江戸時代には諸国を巡り、加持祈禱をして病を治したりしていた。それらの面影がもたまって天狗という妖怪の姿が考えられるようになったのだそうだが、この高尾山にも天狗にまつわる話が残っている。

例えば、寺内にある八王子市指定天然記念物の蛸杉は、参道を造っていた天狗達が、大きく張り出した杉の根が邪魔だから切ってしまうとと相談していたのを聞いて、杉の木が一夜にして根を丸めて蛸の足のようになったという伝説をもっている。

最後に薬王院に残っている文化財を紹介しよう。

不動堂には本尊の不動明王像、二童子像があり、いずれも室町時代の寄木造りである。

護摩堂には藤原時代のものでされる寄木造りの地藏菩薩立像の他、室町時代のものと思われる薬師三尊像、十二神将像がある。その他、刀剣、古文書などが残っているが、いずれも貴重なものである。